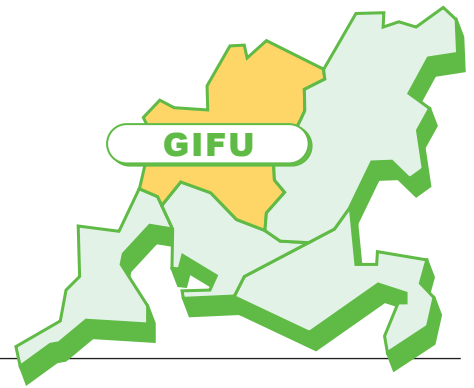


中部 だより



中経連事務局員が、担当するエリアでお聴きした、各県の最新トピックや地域特有の情報を紹介するコーナーです。

美濃和紙と「うだつの町」による地域おこし

概要と背景

岐阜県美濃市は人口が約22,000人(2015年1月)と、岐阜県内で一番人口の少ない市である。また、65歳以上比率は31.2%と全国平均(25.9%)を大きく上回る。

産業構造としては製造業の割合が高く、産業別の従業者数は製造業が49.5%を占める。製造業の比率が高いのは、1990年に分譲開始された工業団地である「美濃テクノパーク」の効果が大きい。

そうした美濃市における代表的な地場産業が、日本屈指の歴史と伝統を誇る美濃和紙である。その歴史は古く、8世紀前半に写経用の和紙として美濃和紙の名が見られるだけでなく、奈良の正倉院に現存する702(大宝2)年の日本最古の戸籍用紙にも使われている。平安時代以降、紙の生産が盛んになる中で、丈夫なうえ質の良さでも定評があった美濃和紙は、全国的に名を馳せることとなった。

現状の課題

1300余年の伝統を受け継ぐ美濃和紙だが、明治・大正時代の最盛期には約4,000戸の家が手漉き和紙に従事していたものの、戦後、日本人の生活様式の変化とともに生産者が徐々に減り始め、現在では15戸となっている。現状の課題は①後継者不足、②原材料の確保、③和紙需要の低迷、④知名度・ブランド力の向上、⑤観光地としての魅力・受入体制の不足などである。

戦略と取り組み

そのような中、2014年、美濃和紙の一つの 카테고리である本美濃紙を含む「和紙：日本の手漉き和紙技術」がユネスコの無形文化遺産に登録された。本美濃紙は伝統的技法を守って漉きあげられる

最上級の書院紙(障子紙)で、国の重要無形文化財に指定され、美濃和紙の中でも定められた技法によって漉かれたものに限られている。

このユネスコ登録を千載一遇の機会として、美濃市は「美濃和紙伝承 千年プロジェクト」を立ち上げ、手漉き和紙技術の伝承と地域活性化を図っている。具体的には、後継者育成基金の拡充による後継者の育成、新商品開発による産業振興、和紙と「うだつのあがる町並み(重要伝統的建造物群保存地区)」による観光産業の振興などである。



「うだつ」とは屋根の両端を一段高くして火災の類焼を防ぐために造られた防火壁のことで、美濃市は江戸時代の商人の町でこの「うだつ」が多く残っている。町並みには江戸～明治時代にかけて造られた商家が軒を連ね、古いたたずまいを見せている。この町並みを美濃和紙の展示・販売等と組み合わせるとともに、岐阜県内の世界に誇れる歴史遺産(白川郷、長良川の鮎、高山祭などの屋台行事)との連携による誘客促進等に取り組んでいる。

こうした観光客の受入環境整備と広域周遊観光ルートの確立により、観光客の誘致や地域活性化を図る取り組みに対し、中経連としても昇龍道プロジェクトを通じた後押しを行っていききたい。

(岐阜担当 加藤 慎哉)

協力：美濃商工会議所